



OVERSEAS

Republic of Guinea

— ギニア共和国 —

海外事情



掴みどころの無いギニアという国



金指 大地 KANZASHI Daichi

八千代エンジニアリング株式会社
国際事業本部/施設部/公共施設課

ギニアという国にどういったイメージを思い浮かべるだろうか。シンプルに表現する方法を考えたが難しい。アフリカの貧しい国というイメージが先行しがちだが、それだけではない掴みどころの無さがある。現地人に「ギニアはどんな国か」と尋ねると、酸いも甘いも様々な答えがあり、決して満足してはいないが自分の国が好きなのだと感じられる。まだまだ経済成長の途上だが、今後どう変化していくか目が離せないギニアを紹介したい。

首都コナクリ

ギニア共和国はその名にもある西アフリカのギニア湾、通称象牙海岸

に面する国家で日本の本州と同程度の国土を有する。西アフリカ沿岸国の多くの例に漏れず、首都であるコナクリ特別市は大西洋に面している。

コナクリで観光名所とされる場所あまり無いが、市中心部に巨大なモスクがありランドスケープとなっている。発展途上の都市にあって非常に壮大なモスクはまさしく圧巻だ。ギニアはイスラムの多い国であるが規律があまり厳しくなく、騒がしくしなければモスクへは誰でも入ることができる。もう一つの名所としてモスク近くにギニア唯一の国立博物館があるものの、悲しいことに10分程度で全て見終わってしまった。

税収の少ないギニアにあっては公共施設を維持するのも一苦勞であることを感じた。展示品はほとんど無かったが、撮影禁止と言われてしまったため外観のみ撮った。

コナクリでは近年急速に高層の建物が増えてきているものの、その多くは建設途中のまま放置されている。運転資金の尽きた建設会社は次の収入が入るまで建設を中断してしまうため、建設スケジュールが読めない。何回訪れても全く様子の変わらない建物もあれば、安全性と品質に不安を感じるほどのスピードで建てられているものもある。仮囲いも不十分のため安全性の観点からは難があるが、これほど一般にオー



写真1 コナクリ市中心部の大モスク



写真2 閑散とした国立博物館



写真3 コナクリ市街



写真4 野菜と果物の店

プな建設現場は日本ではまずお目にかかれない。街が変わっていく様子をダイレクトに見られることができる。

ギャップが広がる生活インフラ

ギニアでは都市インフラが未整備である場所が多く、古くからある建物や予算の無い省庁は水や電気が安定的に確保できていない。昼間に計画停電が行われることもあり、それでなくともエアコンも半分程度の確率で故障しているため、文字通り蒸風呂のような部屋で仕事することもあった。更にコナクリ市であっても中心部を外れると給水網が無く、個別に整備された井戸を共同で使っているようである。

一方で近年は、コナクリ周辺と比べると驚くほど豪華なホテルも増えており、一般のビジネスホテルでも100 USD前後と高価であるものの、外国人向けに建てられたホテルは水や電気もちゃんと整備されていて生活には申し分ない。援助関係者として渡航する分には嬉しい限りだが、限られた資源が自国民でなく外国人である自分たちに割かれていると思うと、何ともやりきれない気分である。

意外と多彩な食事情

食事は現地の食に加え、中東料理、韓国料理、中華料理、ベトナム料理と多岐に渡り、数は少ないもののイタリアンやフレンチもあり、意外と多様な食が楽しめる。日本人の性なのか、どうしてもアジア料理に足が向いてしまうが、約2,000円でコース料理のようなものを味わうことができることは、ギニアでの楽しみの一つである。

地元の料理は、肉と野菜を煮込んだ辛めのシチューとクスクスのようなものが定番だが、少し高級な屋外レストランでは新鮮なローストチキンを味わうことができる。また農業が盛んなだけあって、街中の出店では野菜やフルーツを手に入れることができる。ギニア人はマンゴーが好きで、我々のレンタカーのドライバーも道端でフルーツ店を見つけると車を止めて買いに行ってしまうほどである。道端でギニア人が頭に大皿を載せてバナナを売りに来る光景などは、もはや日常茶飯事だ。

金銭事情

ギニアではGNF（ギニアフラン）という通貨が使われており、最高額紙幣は20,000 GNFである。と聞くと結構な額に思えるが、日本円にし

て約200円程度である。おまけにレートの良い換金所では更に細かい5,000 GNFや10,000 GNFの紙幣しか持っていないことも多い。500 USDも換金しようものならレングブロックのような札束を渡されるため、財布などは役に立たず、支払いが必要な時などはスーパーの買い物袋に詰め込んで持ち運ぶハメになる。

一方、会計や勘定は意外なほど（と言っては失礼だが）正確だ。レストランでの会計など、ものによっては額面で100万～200万GNFとなるものもあり、紙幣が数枚抜けても気づかないと思うのだが、お釣りも正確だ。紙幣の数え方も独特で、その

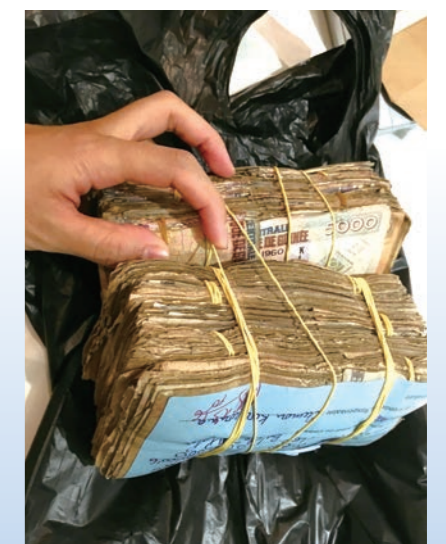


写真5 レングのような札束



写真6 20人が乗るマイクロバス



写真7 マムー州の高原都市

練習をしているのだが、なかなかうまくできない。

物価そのものは外国人には安く、現地人には高めだと感じるが、携帯電話は非常に普及しており、スマートフォンを数台持っている人もいる。1カ月の通話料はだいたい20,000～50,000 GNF（約150～300円）で、インターネットの通信料も、普通に仕事をする分には1カ月約500円と非常にリーズナブルである。

摩訶不思議な車たち

ギニアではタクシーやマイクロバスが公共交通として使われている。発着所や時刻表のようなものは無いが、数多く街中を走っているため、流しで乗ることもできる。運賃も1km当り1,000 GNF（約10円）と申し分無い。しかし、問題は乗車人数である。

通常タクシーに使われる乗用車の定員は4人であるが、ここギニアでは6～7人が当たり前のように乗っている。4人より少ないタクシーはまず見かけることがないことから、どうやら相乗りが通常のようだ。荷物も人数分が正しく納まるはずもなく、半開きのトランクをロープでくくりながらデコボコ道を走っている。

更に不思議なのはせいぜい10人乗りが限界と思われるマイクロバスに、どう見ても20人以上が乗って移動している光景である。車自体も決して新しくはなく、日本人よりも遥かに体格の大きいギニア人がすし詰め状態で移動しているのを見ると、4WDのレンタカーに規定人数で乗っているのが申し訳無く思えてくる。

物資の少ないギニアでは、使えるものはとにかく使い続けるという精神を感じる。安全面を考慮して公共タクシーには乗らないようにしていたが、機会があればぜひチャレンジしてみたい。

内陸に足を踏み入れて

渡航時のほとんどの期間をコナクリ市で過ごしたが、一度だけマムー州という地方を訪れたことがある。内陸部にある高原都市は空港が無いいため車で移動するしかなく、コナクリ市からの幹線道路が1本しか整備されておらず、おまけに未舗装区間も多いため、通常でも約6時間かかる。今回は輸送用トラックがスタックして、その幹線道路が通行止めとなってしまい、実に10時間近くかけた大移動であった。

夜7時頃ようやく到着したホテルは、電気がほぼ切れかけでシャワ

ーも水のみで、何もすることができなかった。小さいレストランではメニューにあるものがほとんど無く、仕方なく油まみれのチキンとポテトを食して多難な1日を終えた。コナクリのインフラ事情が良いものに思えてきた。

ところが翌朝目を覚ますと、夏の終わりにも関わらず、非常に涼しく澄んだ空気を全身に浴びることができた。緑に囲まれた山あいの景色も美しく、街もあまり開発されているわけではないが、きれいに整備されている印象を受けた。アクセスさえ改善されれば、避暑地としての潜在的資源は多いように思えた。ギニア人のドライバーは「もっと内陸にはたくさん自然があつて是非お勧めだ」と言っていた。半信半疑ではあったが、そこから先は未知の領域であり、仕事で行くのであれば冒険心をくすぐられるところである。

ギニア国の教育事情

ギニアでは教育環境の改善が最重要課題の一つとされており、学校へ行くべき年齢の子どもに対して、とにかく教室が足りていないという現状がある。日本の無償資金協力プロジェクトの小中学校建設計画に関わって分かったことだが、既存



写真8 生徒過多の教室



写真9 トイレ職人

の学校は通常どおりのカリキュラムが実施できておらず、午前と午後の2部制をとっているケースが多々ある。それでもなお教室が足りないため、規定人数以上の子どもがところ狭しと教室に詰め込まれており、定員50人の教室に対して100人以上が同時に授業を受けていることもあった。

黒板の文字も判別できないほど室内も薄暗いが、目の良いギニア人の子どもにとっては不自由なく授業を受けられるようだ。このような中で授業を受けざるを得ない状況には心が痛むが、子どもたちは楽しそうに授業を受けている。ここにいる多くの子どもたちがギニアの将来を作っていく。その出発点である小中学校の教育環境の改善に関わったことを誇りに思う。

垣間見た暮らしの一端

ギニアは他のフランス語圏の西アフリカ諸国と比較して、社会主義体制が長く続いたことで民主化による発展が遅れている。定期的に行われる政治デモやストライキでは人々

もかなり激しくなるが、それ除けば西アフリカ諸国と比べて治安は悪くないと思う。「ニーハオ」と話しかけられることには慣れてしまったが、ギニア人は比較的気さくで穏やかな人が多い。一方、道路のど真ん中でサッカーに興じる青年たちは真剣そのものだ。ボールの威力も青年たちのエネルギーも侮れないため、近くで見たい気持ちを抑えて遠くの車窓から観戦することをお勧めする。

最後に現地で発見した何とも興味深いトイレ事情の一旦に触れてみたい。一般家庭のトイレユニットは

何と職人による手作りの既製品が普及しており、セメントと砂を混ぜわけてタイルで装飾されたものが道端で販売されている。形としても非常にレベルの高い精度であり、3分間クッキングのような軽快さで次々と製品を仕上げていく姿に驚くばかりであった。

穏やかなようではあるが時には激しく、雑多な街とは裏腹に意外と器用な人々と、今後どうなっていくか想像もつかないギニアには、徐々に目が離せなくなってくる魅力があった。



写真10 路上サッカー